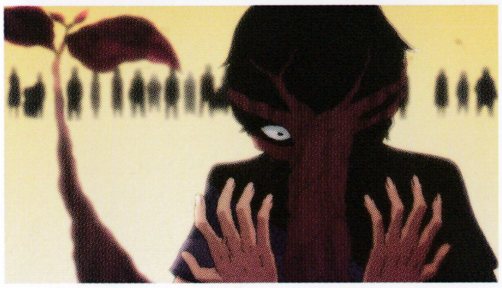

ゲゲゲの鬼太郎
1

DISC 1





第 1 話

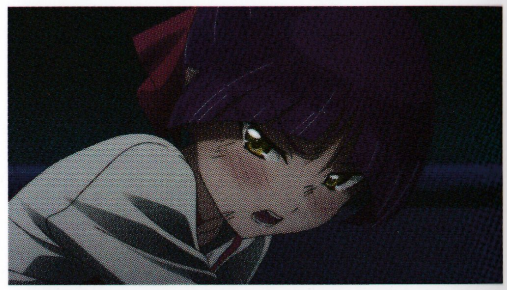
妖怪が目覚めた日

街行く人々が木に変身してしまう不可思議な現象が発生していた。中学生のまなが半信半疑で妖怪ポストに手紙を出すと、ゲゲゲの鬼太郎がやってきた！原因を探るため地下施設へと向かう二人を待ち受けていたのは……。

演出：小川孝治　脚本：大野木 寛　作画監督：清水空翔　美術：今野慎一

第 2 話

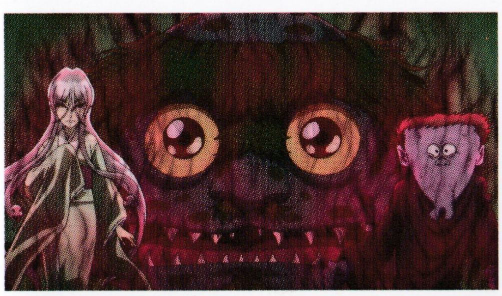
戦慄！見上げ入道

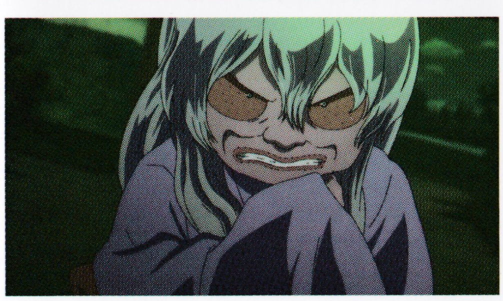




コンサートの来場者が一瞬で消えてしまった！事件の背後には、ねずみ男が関係していた。鬼太郎とねこ娘が駆けつけると、偶然まなもやってきた。会場にもぐりこむと、そこには来場者達を吸い込んだ妖怪が……。

演出：竹下健一　脚本：大野木 寛　作画監督：浦田幸博　美術：今野慎一





第 3 話

たんたん坊の妖怪城

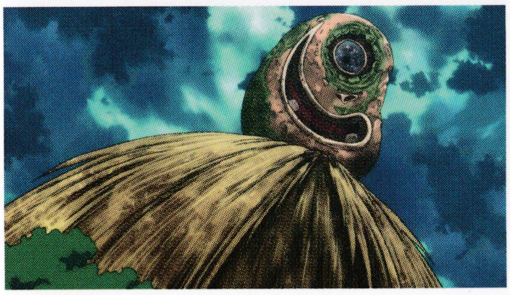
各地で子供達の失踪事件が起こっている。かつて封印された妖怪が誘拐していたことが明らかになるが、今度はまながさらわれてしまう。鬼太郎は砂かけばばあや子泣きじじいらと共にまなの奪還に立ち上がるのだった!

演出：中村明博　絵コンテ：小川孝治　脚本：吉野弘幸　作画監督：清山 滋崇　美術：今野慎一

第 4 話

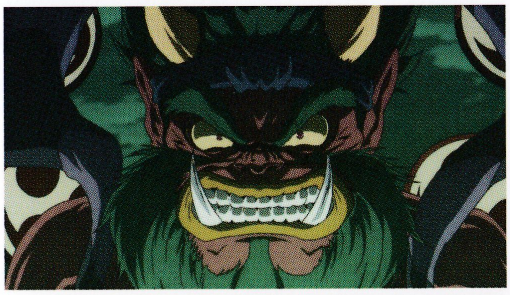
不思議の森の禁忌





裕太が、まなから鬼太郎の話を聞きだし、ゲゲゲの森に来てしまった。帰そうとする鬼太郎だが、目玉おやじに促されて、森を案内することに。ところが、突然森が豹変！次々と襲われる鬼太郎達。裕太がその原因だというが……。

演出：門 由里子　脚本：大野木 寛　作画監督：市川吉幸　美術：今野慎一





第 5 話

電気妖怪の災厄

人間から全く恐れられなくなった妖怪・かみなり。その力を持て余していたところに、ねずみ男が目をつけた。かみなりが生み出す電気を商売にしたところ、大当たり！喜ぶねずみ男だったが、次第にコントロールがきかなくなり……。

演出：中村明博　脚本：金月龍之介　作画監督：太田晃博　美術：今野慎一

第 6 話

厄運のすねこすり





山里で一人寂しく暮らすマサエのもとに鬼太郎が現れる。呼んだのはマサエに妖怪が取り憑いていると言う一人息子の翔。しかし、マサエは翔の言葉に耳を貸さず、体はどんどん衰弱していく。マサエに取り憑いている妖怪とは……。

演出：古賀 豪　脚本：井上亜樹子　作画監督：小泉 昇　美術：今野慎一

DISC 2





第 7 話

幽霊電車

妖怪の存在を信じないとある企業の社長達の前に鬼太郎が現れる。鬼太郎が反論すると、社長は鬼太郎を突き飛ばし立ち去る。家に帰る社長達だが、不思議な臨時列車に乗ることに。こののち、世にも恐ろしいことが起こるとは知らずに……。

演出：地岡公俊　脚本：吉野弘幸　作画監督：浅沼昭弘　美術：今野慎一

第 8 話

驚異！
鏡じじいの計略

まなはとある村での社会科見学で、古い石碑を倒してしまった。その後、まなの身の周りでおかしなことが起こりはじめる。妖気を感じ取った鬼太郎達がかけつけると、鏡の中に捕らわれているまなが！妖怪・鏡じじいの仕業なのか!?





演出：角銅博之　脚本：井上亜樹子　作画監督：袴田裕二　美術：今野慎一





第 9 話

河童の働き方改革

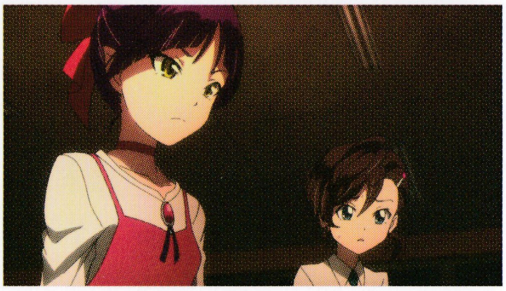
人手不足に悩む社長・郷原。弱ったところをねずみ男と知り合い、二人は河童のあっせんを始めた。河童達は時給キュウリ３本という安い給料で大満足。しかし、次第に自分達は搾取されているのではと疑念を持ち始め……。

演出：山元清里　脚本：横谷昌宏　作画監督：信実節子　美術：今野慎一

第 10 話

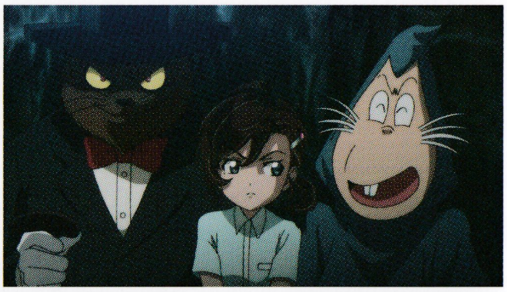
消滅！学校の七不思議

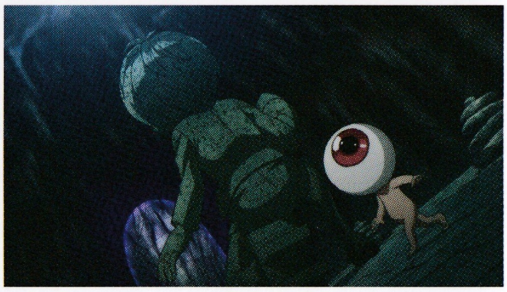




学校の七不思議のひとつ、"トイレの花子さん"はねこ娘の友達だということがわかり、花子のところへ行ってみるねこ娘とまな。しかし、花子は見当たらない。他の七不思議に登場する妖怪達も近頃姿を見せない。何者かの気配を追いかけると……。

演出：飛田 剛　絵コンテ：大畑晃一　脚本：横谷昌宏　作画監督：大西陽一　美術：今野慎一





第 11 話

日本征服！八百八狸(はっぴゃくやだぬき)軍団

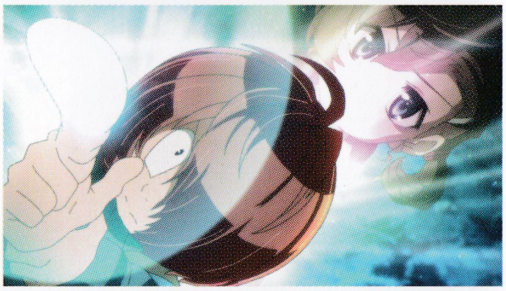
突如夜空に二つ目の月が現れた！一方、日本では200年以上前に封印されたはずの八百八狸達が電波をジャックし日本政府の乗っ取りを宣言した。助けを求めようとしたまなは捕らえられてしまう。鬼太郎は狸達の企みを阻止できるのか!?

演出：やしろ駿　脚本：大野木 寛　作画監督：市川吉幸　美術：今野慎一

第 12 話

首都壊滅！恐怖の妖怪獣





刑部狸(ぎょうぶだぬき)の呪いによって石になった鬼太郎を助けるため、まなやねこ娘達は再び地下へ向かう。捨て身の覚悟で狸軍団と戦う砂かけばばあや、子泣きじじい達。鬼太郎達はこの危機にどう立ち向かうのか!?

演出：中村明博　脚本：大野木 寛　作画監督：藤原未来夫　美術：今野慎一

ゲゲゲのお喋り 1



ゲゲゲの鬼太郎役
沢城みゆき

×



目玉おやじ役
野沢雅子

ゲゲゲの鬼太郎を演じる沢城みゆきさん、目玉おやじを演じる野沢雅子さんにご登場いただき、『ゲゲゲの鬼太郎』(第6期)の始まりから、アフレコの様子、本BOXに収録されているお話に関することまで語っていただきました。

鬼太郎はのんびりとした男の子

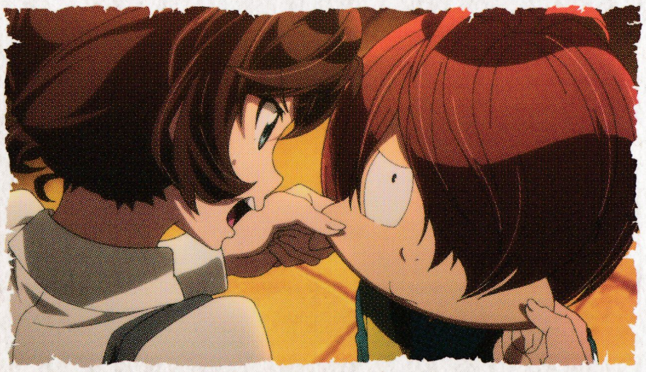
——本作でキャストにご決定されたときの感想をお聞かせください。

野沢雅子(以下、野)：「うわーっ！」て嬉しかったです。

——野沢さんは第1～2期で鬼太郎役を、今回は目玉おやじという驚きのキャスティングです。

野：私の中では、鬼太郎が成長してお父さんになったんだっていう、そういう感覚でいます。

沢城みゆき(以下、沢)：世間からは「鬼太郎を演じるってすごいですよね」という熱いご意見が多かったんですが、私個人としてはすごい作品のすごいキャラを演じるというよりは、わりとのんびりとした男の子を演じようと考えました。鬼太郎はあまり立派ではないですし、テレビの前で見てくれている小学生の男の子たちと、大差のない男の子が奮闘するというのを大事にしようと思いました。もちろん、大作だということはわかっているんです。わかってはいるんですが、鬼太郎って、のんびりしているときとガンバるときの温度差がすごい男の子だと思います。そのレンジの広さが、キャラとしての面白さだと思ったので。



——野沢さんから見て、沢城さんの演じる鬼太郎はいかがですか。

野：いいですよ、すごく！　本当に自分の息子のような気になっています。みゆきちゃんが言ったように、私も『ゲゲゲの鬼太郎』は、大作っていう感じじゃないと思うの。やっぱり鬼太郎っていう少年が、気ままに好きに動いているっていうのが、とってもいいんだと思います。原作だって、身近にあるお話が多いわけでしょ。

沢：マコさん(野沢雅子さんの愛称)がやってらした鬼太郎が、一番原作に近いですよね。こう……普通の子供というか、少年感が強くて。

野：そうなんですよ。

沢：収録の前に、原作も含めて観られるものはできる限り拝見しました。マコさんの第1～2期のあとに、正義の味方然とした戸田恵子さんの鬼太郎(第3期)があって、松岡洋子さんの鬼太郎(第4期)はもう少し妖怪っぽい雰囲気で、高山みなみさんの鬼太郎(第5期)はすごくスタイリッシュで格好いい雰囲気でした。そして第6期になって、もう1回第1～2期に近い鬼太郎に戻った、1周したのかなっていう感じがありますね。

鬼太郎は普通の感覚を持っている

——今回の鬼太郎は、1話1話印象が違うように思います。

沢：そうですね。毎回見せる面が少しずつ違うので、そこを楽しんでいます。一貫性もある程度必要ですが、鬼太郎は判で押したようにいつも同

じキャラクター然とした子じゃなくていいんだと思っています。リアルな世界で考えると、お家にいるときはだらんとしてるし、働いているときはシャンとしてるし、会う人によって見せる顔は誰もが違っていますよね。アニメは作り物の世界ですが、そういういくつかの顔があるリアリティを持ち込んでいいのが鬼太郎なのかなと思うので、楽しみながら演じています。ただ基本的に、いくつか踏み外したらいけないポイントがあって、それだけは守りながら、のびのびとやらせていただいています。

——そのポイントをお教えください。

沢：小川(孝治)監督ともご相談しながら、“今回の鬼太郎”を確認しながら、演じています。というのも、第1～5期で、それぞれ描きたい鬼太郎像が違っていましたよね。なので視聴者もスタッフも、どの鬼太郎を観ていたかによって、鬼太郎像がずいぶん違うんだなと感じているんです。だから、過去のシリーズは関係なく、第6期の鬼太郎としてブレないようにしています。今回の鬼太郎は、何かもめ事が起きた時に、人であろうが妖怪であろうが、泣いていたら「どうしたんだい」ってまず聞きに行く。そのときに「助けて」って言われたら助ける。なぜって「だって、傷ついているじゃないか」って、ものすごくプレーンな理由で動くことがあるんですよ。妖怪だから、人間だからという線引きではなく、悪いことをしていると思われる側にもまずは、その理由を問う。つまり勧善懲悪的な“正義のヒーロー”ではないんです。そこが、今期の魅力なのかなと感じています。

——今回のBOX1に収録されている中では、第7話「幽霊電車」が、一番異色な回でした。

沢：あれは特に、人間側から見た鬼太郎になっているんだと思います。本人は脅かそうとしているわけじゃないんですが、当人が自分の中にちょっとでも後ろめたいことがあると、あんなにも不気味に見えることがある。だから私は、あの回ばかりは鬼太郎のそばにいるというよりは、人間側にいて「怖いね。この人」という感覚で演じました。



主役だらけの鬼太郎ファミリー

——目玉おやじは第1話を観たみなさんから「可愛い」という声が多くありました。

野：私は田の中(勇)さん(第1期～第5期で目玉おやじ役)の目玉おやじと長年一緒だったから、そのイメージが大きいんですよ。でもそれは別として、私のお父さんでいいと思って演じています。私としては、田の中さんに近づけるということはしないで、私なりの目玉おやじでいきたいですと言ったらOKをいただいたので、自由にやらせていただきました。

——野沢さんは最近の出演作品では、ずっと主役をやられていたので、目玉おやじは楽しんでやってらっしゃるんじゃないですか？

野：楽しいですね！　言葉にするのは難しいですが、主役と違って気楽と言ったら気楽なんですよ。やっぱり、主役だとある程度作品を引っ張らないとならないじゃないですか。目玉おやじはそういうことを考える必要がなく、すっと入っていけるんですよ。それがいいですね。自由にやらせていただいています。

沢：マコさん以外の先輩たちもそうですよね。他の番組だと主役をやり続けている先輩も、本当にのびのびと楽しそうにやってらっしゃるなと思います。何回世界を救ってきたんだろう、というメンバーですよね。

野：みんな、楽しんでいるように見えますね。

沢：本当にアドリブを入れ込んできますね。一反



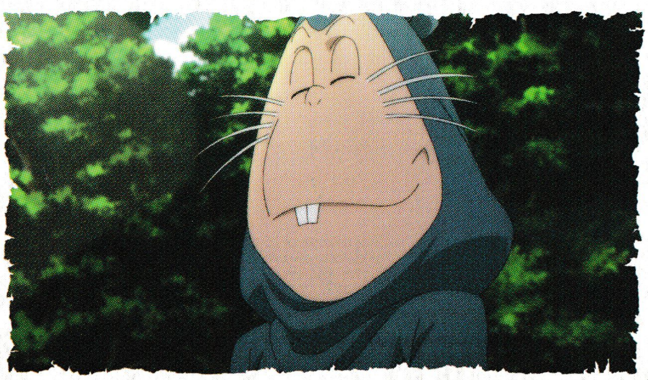
もめん役の山口勝平さんの「コットン承知」に始まり。あれは、勝平さんがご自身で言い出して、それが脚本に採用されたんです。

野：そう。本当にのびのびとやってるわね。

沢：一反もめんの方言は、九州出身の勝平さん自身が脚本の標準語を九州の方言にしてアフレコしているんです。脚本とは違うことをおっしゃるので、(田中)真弓さんとかが「今どこしゃべってるの？」ってなったりして(笑)。真弓さんもとうとう「チューするぞ！」が市民権を得ましたね。砂かけばばあのチューって……怖いですよね。そんな感じでいつも和やかで、すごく雰囲気がいい現場です。

野：すごくいい雰囲気で演じさせてもらっていますね。そうそう(笑)。古川(登志夫)さんは、ねずみ男役を、すごくやりたかったそうですよ。

沢：私からすると、古川さんはカッコいい役のイメージが強いので驚きました。本当に生き生きと演じられていて、すごいなと思います。アドリブなのかなって思わせる演技をされるんですけど、台本通りなんですよね。全然アドリブで言葉を足すことはなさらないんです。なんでこんな風にできるんだろうって思いながら聞いています。



現代社会と鬼太郎たち

——そんな今回の『鬼太郎』の世界観を観ているだけで、視聴者のみなさんは癒されているのではないでしょうか？

野：そう思ってくださっていたら、最高ですね。

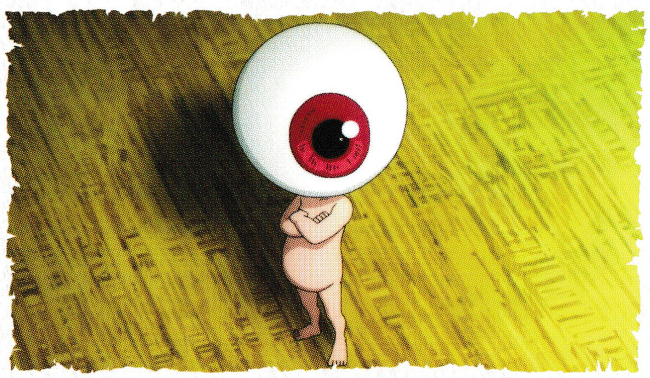
沢：学校も試験もなんにもないですからね。最近は鬼太郎たちって、人間と違って時間が止まった人たちなんだなと感じて、改めて面白いなと思っていますね。原作から時間が経つほどに、ゲゲゲの森と私たちの差がどんどん開いている感じがします。元々原作の中でも、政治に苦言を呈したりとか、時事ネタがいっぱい入ってくるじゃないですか。それがどんどん進んでデジタル社会になって、ものすごくはっきりしてきましたよね。

——第1話冒頭からYouTuberが出てくるなど、ゲゲゲの森の妖怪たちと現代の人たちとの対比が面白いですよね。

野：今のことがちゃんと描かれているから、観ている人たちもこの世界に入りやすいんじゃないのかな。

——さらには、第1話ラストの衝撃的な出来事から、まだまだ謎もあって、物語としての縦軸も気になります。

沢：そうですね。今ちょうどアフレコは第19話まで終わりましたが、ちょっとずつ縦軸が動き出したりしていて……一連の妖怪が関わっていた事件に関連性があるやも？という部分に、鬼太郎がどう関係してくるのか楽しみに観ていただきたいですね。



すねこすりの回が一番……!?

——BOX1に収録されている第12話までで、印象に残っている妖怪やお話はありますか。

野：もう全部がいい！だからどれかって言われると、困っちゃうんですよね。その回その回でそれぞれ物語があって、妖怪たちもいいじゃないですか。

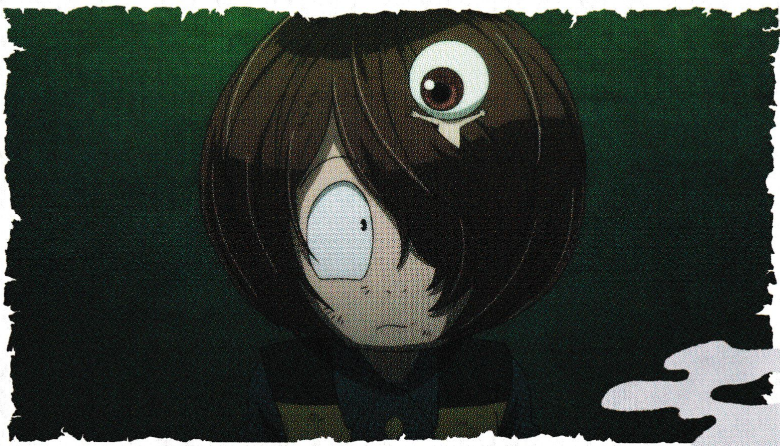
——では第1話はいかがでしたか。初めて目玉おやじとしてしゃべるシーンがありました。

野：いやもう、最高でした。いろいろな想いがあって……なんと言っても、目玉おやじというと田の中さんの声が染み付いていますからね。田の中さんだったら、こうしないんだろうな……なんて思ったりもしましたけど、でも私の目玉おやじなんだって、すぐに考え直して。田の中さんは田の中さんのよさがあるけど、私は私の目玉おやじでいこうって。だから最初はやっぱりトーン的に、わりと近づけつつ高めだったんですけど、もっと低い



ほうがいいと思いますって監督におっしゃっていただいたので、それから下げたんです。そうだよな、私の目玉おやじなんだからと思って。
沢：確かに1つを選ぶのは難しいですよね。特に今期は1話1話色合いも雰囲気もまったく違っていて、カテゴリが違うので選びづらいです。ですが、個人的に猫を飼っているので、どうしても“すねこすり”の回（第6話「厄運のすねこすり」）はね、悲しい回でしたね。猫を飼っている人は、猫というだけで泣けますよね。そこはちょっとバイアスがかかりすぎてるんですけど……すねこすりは、悪いことしてないですからね。悪いことになったりはしましたが悪さをしていたのではないので、裁きようのない事件だったなという印象ですね。ラストカットの鬼太郎の顔、ああいう表情はあれ以降はないんですよね。なんとも、気持ちの整理のしようがないんですが、それも含めて印象的な回です。でもその後、ゲゲゲの森にすねこすりがいたんで、本当によかったなって思いました。

最後にお2人からみなさんへのメッセージ！
野：BOX1を買っていただいて本当にありがとうございます。これで、お家でじっくり観たいときにいつでも観られます！
沢：今はウェブとか配信とか、簡単に観られる媒体が増えていますが、それでもなお、形として手元に置きたいと思っていただけたのが、本当にありがたいことです。『鬼太郎』という作品に並走してくださっていることにも感謝です。引き続き、『ゲゲゲの鬼太郎』へのご声援、よろしくお願いいたします。
野：私きっとね、大人のみなさんが買ってくださってると思うの。昔、私の鬼太郎を見てくださっていたかたは、三世代で絶対観られると思ってるんですよ。当時小学生だと、50周年だから、孫がいてもおかしくないでしょ？　おじいちゃんおばあちゃん、お父さんお母さん、そしてお子さん。三世代で観て、いろいろな話、会話ができるじゃないですか。家の中での会話って大切ですから。
沢：「お父さんの頃のねこ娘はね」って。
野：そうそう。お子さんが観て、家族の会話に参加できるアニメだと思います。三世代で観ていただけると嬉しいですね。





沢城みゆき

東京都出身。青二プロダクション所属。
代表作は『ルパン三世』シリーズ 峰不二子役（三代目）、『HUNTER×HUNTER』クラピカ役、『攻殻機動隊 ARISE』ロジコマ役、『報道ステーション』ナレーションなど。



野沢雅子

東京都出身。青二プロダクション所属。
代表作は『ドラゴンボール』シリーズ 孫悟空役、『銀河鉄道999』星野鉄郎役、『ど根性ガエル』ひろし役など多数。『ゲゲゲの鬼太郎』第1・2期ではゲゲゲの鬼太郎役を演じている。

永富×小川の

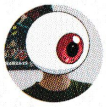
ゲゲゲの部屋



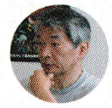
プロデューサー永富と、シリーズディレクター小川がスタッフを招いて、『ゲゲゲの鬼太郎』第6期を語り合う連載コーナースタート！記念すべき1回目は、シリーズ構成を担当している大野木 寛さんとともに、本作の成り立ちをお話しいただきました。


プロデューサー
永富大地

×


シリーズディレクター
小川孝治

×


シリーズ構成・脚本
大野木 寛

企画が始動しスタッフが集いはじめ……!?

永富大地(以下、永)：2016年の年末あたりから『ゲゲゲの鬼太郎』をやろうという話が立ち上がりました。面白い話なのですが、誰がやろうと言い始めたのか、はっきりとせず、まるで"妖怪に呼ばれた"かのように始まったんです……。東映アニメーションとして6回目のアニメ化で、その間に『墓場鬼太郎』もあって、なぜ2018年に『鬼太郎』なのか、どんな『鬼太郎』ならみんなが観たいのか、プロデューサーをやらせてもらえることになった僕は、2017年に入ってからフジテレビのプロデューサーさんとこの企画に関する意見をガンガンぶつけ合ったんです。そしてだんだん形が絞れていき、まずはテレビの監督となるシリーズディレクターと、ライターのチーフであるシリーズ構成をこのお2人にお願いすることにしました。企画を物語として形にしていくときに、どうしてもお2人の力が必要だったんです。

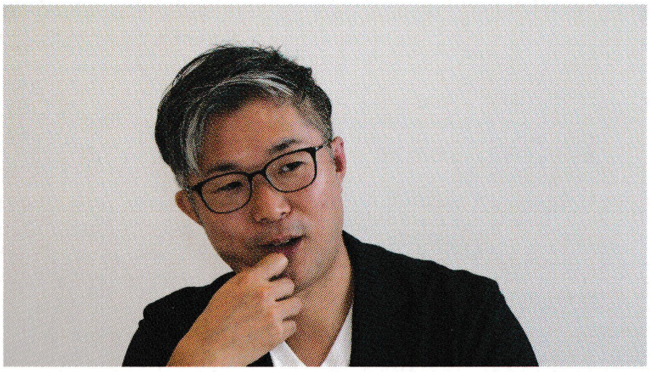
小川孝治(以下、小)：自分のところに話がきたのは2017年2月でしたね。永富さんと制作していた『デジモンユニバース アプリモンスターズ』の食事会の後に、なぜか練馬駅前の路上で話をしたんですよ。

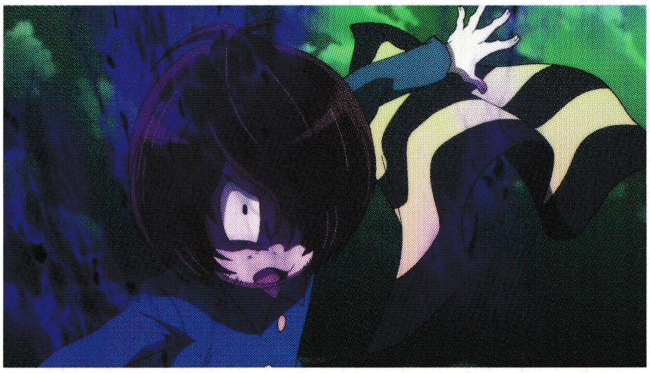
永：寒かった(笑)。そのうえ雨も降ってくるし。路上で2時間くらい話していたんじゃないかな。『鬼太郎』は、いろいろなバリエーションがある作品なんですよ。怖い話もあれば、人間ドラマもあり、アクションもある。いろいろな要素が必要ならば、小川監督が一番ハマるんじゃないかと考えました。ただ、各話の演出として小川監督に力があることはわかっていたのですが、シリーズディレクターという立場でチームを引っ張っていくのは、また別の力が必要なんです。各話の演出さんは、1を2にしたり3にしたりする膨らませる力が必要で、シリーズディレクターは0を1にする生み出す力が必要だと思っています。小川監督は実力があるので、シリーズディレクターを早くやってもらいたかったんですよね。



小：ありがとうございます。

永：大野木さんには、『ワールドトリガー』の2年目の頭の当たりで時間がない中でオリジナルストーリーをやらなくてはいけない状況で本当に困っていたところを助けていただいたんです。スケジュールが厳しいなかで、素晴らしい脚本をあげていただきました。その時に一緒に飲んでいて、インテリでめちゃくちゃ面白いおじさんだなと感じた





んです。あまりそう見えないですが(笑)。
大野木 寛(以下、大):ちょっと! 見えないって(笑)。そこはいらない。
永:SFから妖怪、アイドルまで、すごい知識量と造詣の深さをお持ちで、いつかシリーズ構成という立場で、一緒にお仕事をしたいなと思っていたんです。そのことを思い出して、もしかしたら『鬼太郎』も好きかもと思い、大野木さんのケータイにいきなり電話をかけました。
大:それが2017年の1月末くらいです。その2日後に、幸いなことに僕は監督とは違い、飲み屋で打ち合わせをさせていただきました(笑)。僕は『鬼太郎』の漫画を連載で読んでいる世代なんです。アニメも第1期、白黒版から見ている世代なので、迷わず「やりましょう」と即諾しました。どういう『鬼太郎』にしていくか、その場でいろいろ話したのを覚えています。
永:第6期のシナリオを作っていくにあたり、守らないといけない部分と、新しく変えていく部分のバランス感覚がとても大事だったんです。メインスタッフの中でも常に相談している要素でした。そのなかにあって、大野木さんが原作の『鬼太郎』を読んでいるうえ、アニメ業界で長く仕事をされていて、アニメ『鬼太郎』シリーズすべてを見ていたということが非常に重要なんです。1968年の第1期をリアルタイムで見ていたスタッフは、数少ないんですよね。当時の『鬼太郎』のファーストインプレッションや、社会に与えていたインパクトなど、非常に重要な要素で力をお借りできていると思います。
大:インテリと持ち上げておいて、なんだか物知りのジイさんあつかいになっちゃった。
永:(笑)。大野木さんが子どもの頃に怖かったなら、今の子どもにも怖いかも知れない。そのお話を今の時代にやるならどんな演出にしたらいいかなど、詰めていく作業も楽しいですね。

多様性と犬山まなとねこ娘!?

永:2018年に『鬼太郎』を作る意味・テーマは、“多様性を肯定しよう”と決まりました。『鬼太郎』の世界には、同じ姿をしている妖怪はいないんですよ。だけど妖怪たちは、自分と違うからといって、決して他人を否定したりはしない。これは素晴らしいことなんです。極めつきはねずみ男で、あんなに金と権力に弱くて、すぐに裏切り、すぐに嘘をつくのに、平気な顔をして鬼太郎達のところに帰ってくる。もちろん鬼太郎は、それをときどき叱るし、ポカッと一発殴ったりもするんですが、最後は仲間に戻してあげるんですよね。これは水木しげる先生の持つ、多様性を肯定するという部分だと思います。水木先生にとってはそれが当たり前の話なんですが、今の社会は真逆ですよね。自分と他人の違いをあげつらって、それを理由に喧嘩や差別をして揉める。それって水木先生が望んでいた社会じゃないと思うんです。鬼太郎を妖怪の代表者だと考えて、多様性というテーマを考えると、妖怪の社会と人間の社会の境界線がどうしてもできてしまう。それならば、鬼太郎と同じ目線で同じ多様性というテーマに向き合っていく、人間のキャラクターがいるだろうと考えたんです。そこで人間の女の子・犬山まなが生まれました。そうすると、通常のねこ娘の姿形だとまなと印象が被ってしまうところが多く、アニメとして二人の存在の魅力が少なくなってしまう可能性があったんです。そこから、どのようにねこ娘を変化させようか相談をしていたら、フジテレビのプロデューサーが「ねこ娘をモデルみたいにしてみたら?」とおっしゃられて……僕は「そんなア

ホなっ」と、最初は思ったんですよ。小川監督も最初は怪訝そうでしたが、その場でラフデザインを描いてくれたんです。そうしたらそれが良いかもということになって、現在のねこ娘の原型が出来上がりました。

大：第１期を観ている人間としては、「え、これがねこ娘!?」という想いはありました。けど、できあがったキャラクターデザインを見て、これはありだなと思いましたね。

永：放映後はみなさんに「ねこ娘いいですね」って言っていただいて、ネットや周りの反応もよくてホッとしています。ですが、放送するまではとても怖かったです。下手したらプロデューサーを降ろされかねないとも思っていました(笑)。

大：放送が始まってからは、ねこ娘の登場シーンが無いと「なんで今回はねこ娘が出てこないんだ」と文句が来るようになりましたからね(笑)。

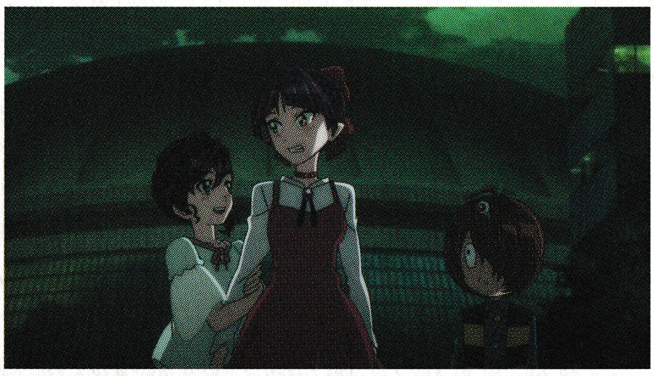
小:これまでのシリーズだと、ねこ娘は戦闘にがっつり参加しないんですよ。ヒロインとしては立つけど、お話全体で出番も減るし、もったいないと感じていました。なので、ねこ娘を戦えるようにしたら、鬼太郎の“パートナー”としてのキャラクターが立つんじゃないかと思ったんです。

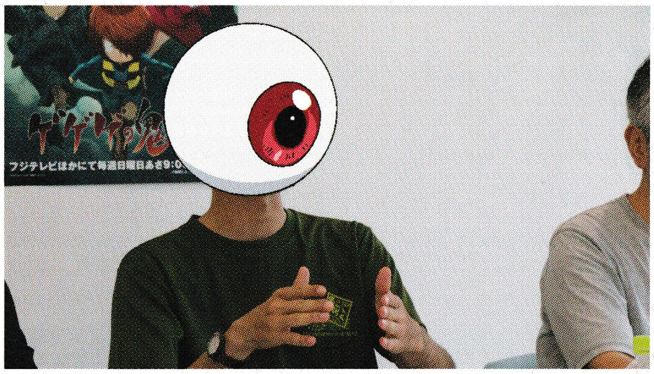
永：近接戦闘、中距離、長距離と役割を考えたときに、実は鬼太郎は近接戦闘よりも中距離戦闘に適した技が多い。鬼太郎が中距離で戦うなら、近接戦闘が強いのが、ねこ娘なんじゃないかと考えました。

小：あと、ねこ娘の演出に関しては、各話の演出さんの好みというか、趣味が反映されているのが面白いですね。

大：本当に！演出さんの個性が出ますよね。

小：出ますね(笑)。そういう遊びがあると、各話演出をしていて楽しいんですよね。このキャラク





ターのこのあたりをいじったら面白くなるかなって。ねこ娘はそういった役割も担っています。

大：脚本家にとって１話完結作品は、実はものすごくやりがいがあって、自分の色を出しやすいから楽しいんです。本当に脚本家によって色の違う、アクションあり、ギャグあり、人情話あり、怖い話ありと、とてもバラエティに富んだ内容になっていると思います。

永：それは最初から想定していました。とにかく多様な話があっていいと。小さい話はとことん小さく、大きな話はとことん大きく。大人はストーリーや物語性を見出したがるけれど、子どもは現象に喜ぶからということを考えて作っています。

BOX1の中でお気に入りの物語は？

永：僕は第３話『たんたん坊の妖怪城』で鬼太郎が言う、「自分と異なるものを認められないやつが大嫌いだ！」というセリフが大好きです。それを言わせたかった。本作品のテーマに通じるセリフですし、セリフだけじゃなく鬼太郎役の沢城(みゆき)さんのお芝居やアニメーション、演出などがうまく合致した、本当に素晴らしいシーンになりました。シナリオ構成上で、とにかく３話までが勝負だとずっと言っていて、それが成功したと思っています。とにかく、気持ちよかったです。

小：自分も第３話ですね。演出を担当したからというのもあるのですが、とにかくキャラクターがいっぱい登場するんです。それぞれ別々の場所で戦っているんですが、同じ想いで一緒に戦っているという空気を作っていくのが、難しくもありつつ、うまく成立させることができました。最後に鬼太郎が地下で柱を破壊したことで、全部の戦況が一気に塗り替えられる。そこで音楽が変わり、一気に決着までいく、そういう流れをいつも意識

しています。それは見えないものではあるのですが、アニメーションでカタルシスを感じさせるときにすごく大事なことなので、こだわって作りました。

永：第3話で初めて鬼太郎がまなを名前で呼ぶんですが、あそこも狙い通りです。あそこから彼女が鬼太郎ファミリーに入る、そういう意味でもいい話になったなと。

小：段取りも悩んだんですが、手を繋いだ後で「まな」と言う構成にしました。流れとしてはそのほうが、一番ぐっとくると考えたんです。そのような細かい所も大事にしています。

大：一番古い『鬼太郎』の記憶は原作の“八百八狸”なんですよ。だから今回、八百八狸の回（第11話「日本征服！八百八狸軍団」、第12話「首都壊滅！恐怖の妖怪獣」）の脚本を自分で書けるというのは、感無量でしたね。あと、こだわっているのは名無しのセリフですね。第12話で初めて喋るのですが、それが意味がありそうでなさそうで、でもちょっと意味がある（笑）、わけのわからないセリフなんです。だからこれ以降の話でも、名無しのセリフは僕が全部書いているんですよ。

小：あれは他の人に書けない、通称“大野木ポエム”と呼ばれていますね。

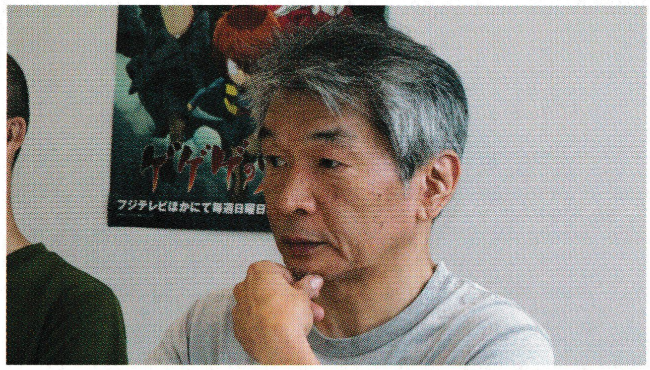
永：それを銀河万丈さんがしゃべるというのが素晴らしいです。

大：あのキャスティングには驚きました。

永：鬼太郎ファミリーに対抗できるのは、銀河万丈さんくらいでしょう！

BOX1を手にとってくださったみなさんへ！

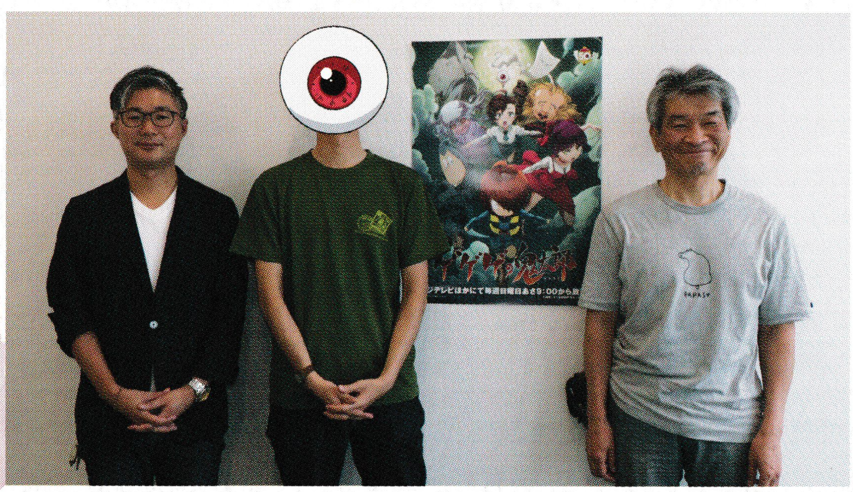
永：実は、まなのスマホケースは毎話変わっているんですよ。ちゃんとそれにも意味がある。BOXを買っていただいたみなさんは何度も見返すことが出来るので、そういうところもチェックしていただきたいですね。



小：妖怪アンテナが立つときやリモコン下駄の音など、一部の鬼太郎の効果音は、実は第3シリーズの音から使っているんです。昔の映像を観ていた人たちにとっては、心の底にある懐かしい音だと思います。同じ会社が『鬼太郎』の効果音を担当しているので、実現することができました。そういう過去作に対するリスペクト、お遊びも入っていますので、BOXだと改めて確認できるかと思います。

大：１週間おきに見ていると、冷却期間があるじゃないですか。だからBOXで一気に、連続してみると、かなり違う印象になるんじゃないですかね。お話のバラエティ感なども含めて、なぜこの順番にしたのかがわかるのではないかと思います。

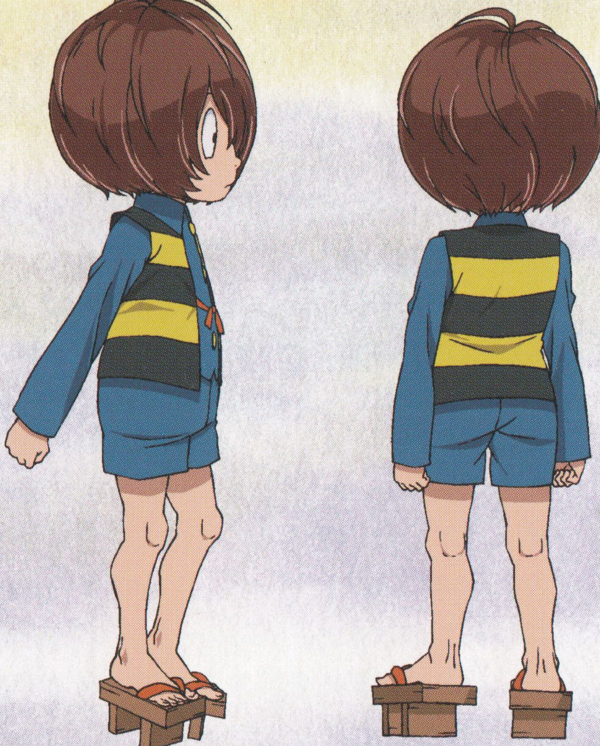
永：その話での登場人物や、身近な問題から、大きなスケールの戦いなど、放送話数の順番には製作側の意図があります。BOXで誰が出てきて、誰が出てこないかなど、注意しながら見ていただき、製作側の意図を読み解くのも面白いかもしれませんね。

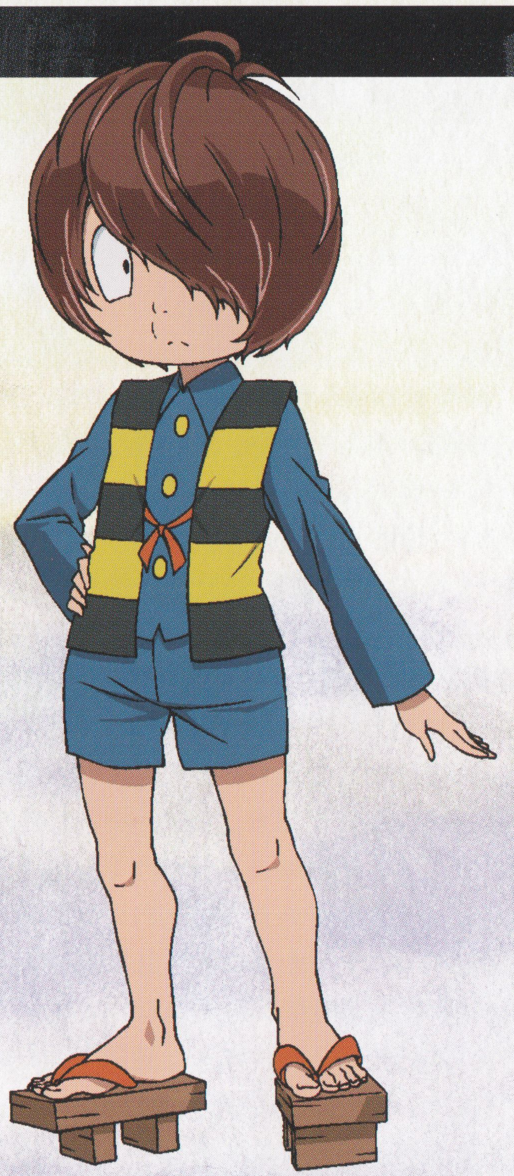


キャラクター紹介

ゲゲゲの鬼太郎

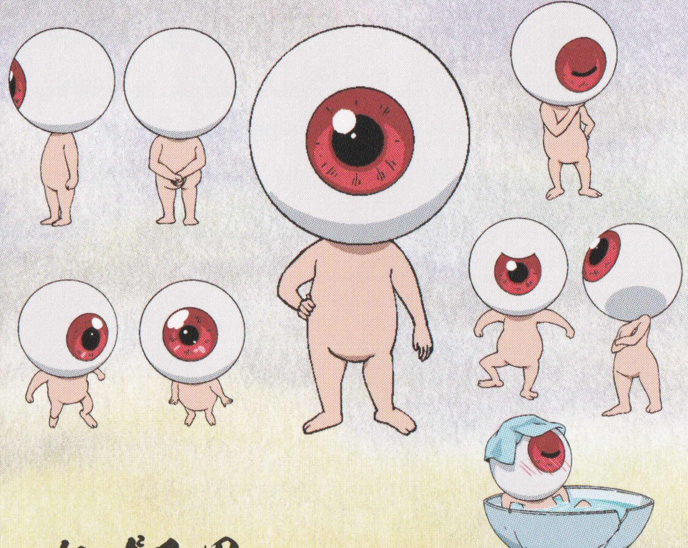
妖怪の中でも非常に強い力を持った幽霊族最後の生き残り。
普段は父親である目玉おやじと共にゲゲゲの森でのんびり暮らしている。
できるだけ人間との関わりを持たないようにしているが、妖怪が引き起こした事件を知らせる手紙が妖怪ポストに届くと、カランコロンと下駄を鳴らして人間の世界にやってくる。





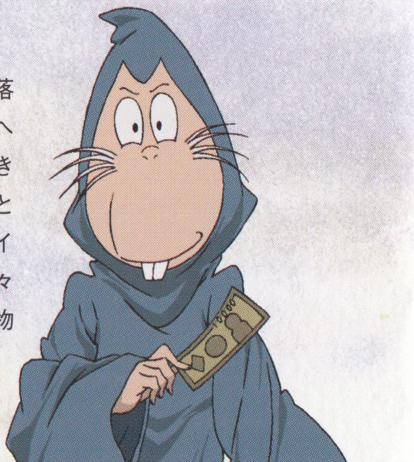
目玉おやじ

幽霊族の妖怪。かつて重い病で命を落としたが、まだ赤ん坊だった鬼太郎への想いが強く、目玉の妖怪として生き返った。実の父親として鬼太郎のことを暖かく見守り、時に的確なアドバイスをする。普段は鬼太郎がいれる様々な種類の茶碗風呂を楽しんでいる。物知りで、妖怪のことに詳しい。



ねずみ男

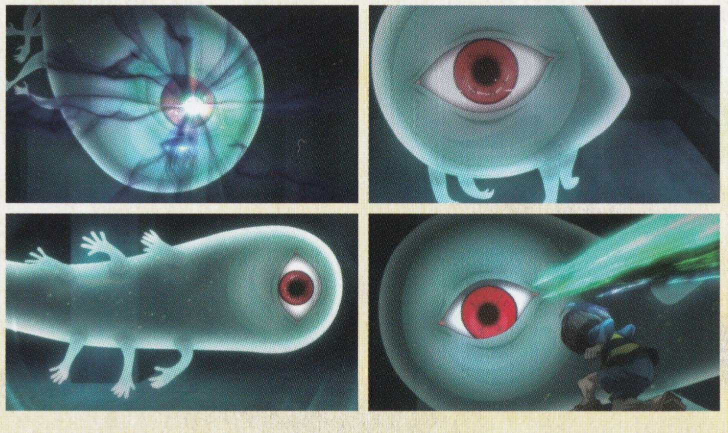
人間と妖怪のハーフ。お金と権力が大好きで、何よりも金儲けを最優先する。あるときは鬼太郎の味方であり、あるときは敵になる。平気で嘘をつき、人を裏切る、欲にまみれた人物。怪しげなビジネスに手を出してはトラブルを引き起こすが、いつも最後は鬼太郎に助けられている。自称鬼太郎の大親友。





#1 のびあがり

空を飛ぶ一つ目の妖怪。
無数にある手足と目から出る光線で相手を攻撃する。
また特殊な種を人間に植えて吸血木を創り出す。その種を植えられた人間は身体中の血液を吸われて真っ赤な木になってしまう。地下奥深くに封印されていたが、何者かが封印をはがしたことによって現代に復活した。





#2 見上げ入道

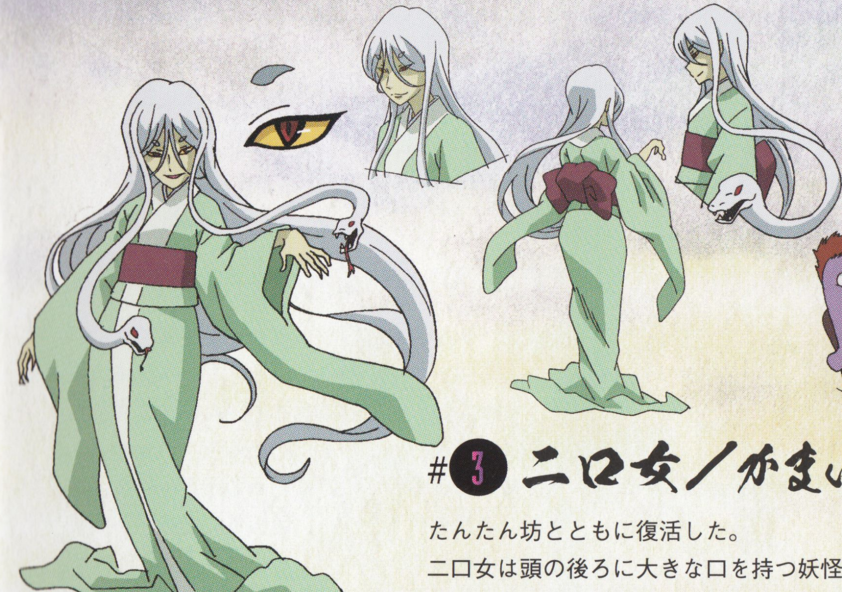
一つ目の巨大な入道の姿をした妖怪。
空気を自由に操り、身体の大きさを自由にかえることもできる。
霊界送りという術を使い、人間の魂を霊界に送ってしまう。
人間の魂を霊界送りにすることで無限の力を手に入れ、日本を支配しようとしている。
元々は封印されていたが……。

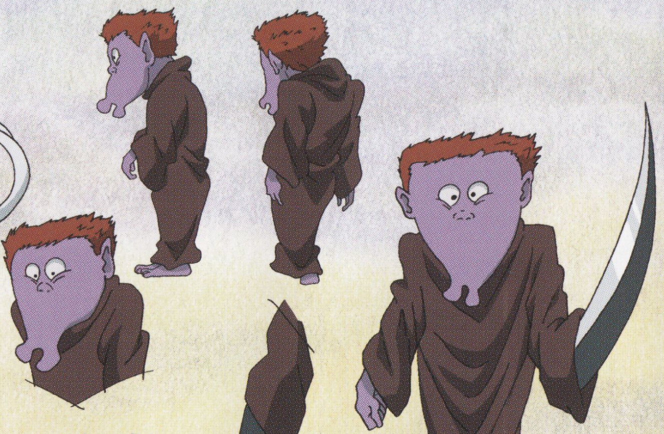


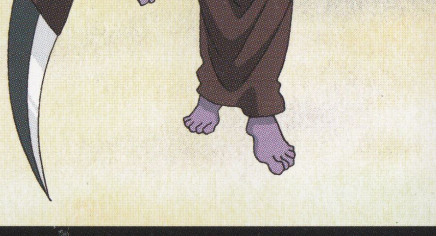
#3 たんたん坊

ぎょろりとした目玉の、巨大な頭だけの妖怪。
口から吐き出されるタンにつかまると、コンクリートのように固められてしまう。仲間の二口女、かまいたちと共に、妖怪城の人柱のため十三人の子供をさらっていった。かつて妖怪城とともに山に封じられていたが、何者かの手によって復活してしまった。







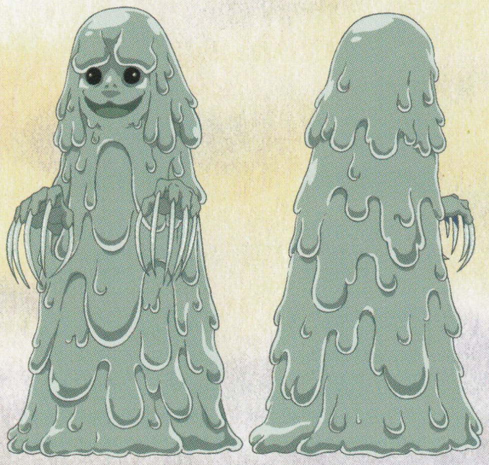


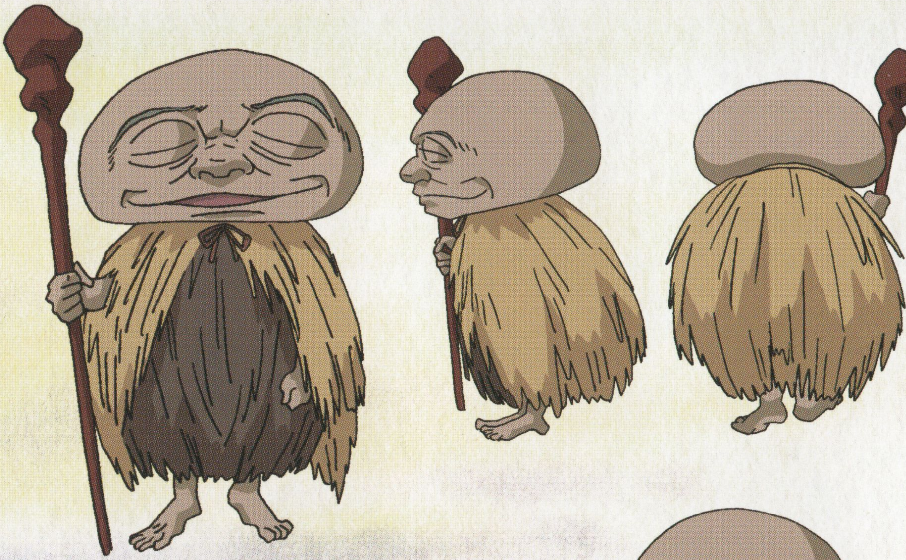
#3 二口女／かまいたち

たんたん坊とともに復活した。
二口女は頭の後ろに大きな口を持つ妖怪。
かまいたちは両手が鋭いカマになっている妖怪。

#4 水妖怪

ゲゲゲの森の、おどろが沼に住んでいる妖怪。裕太を食べ物と勘違いした。





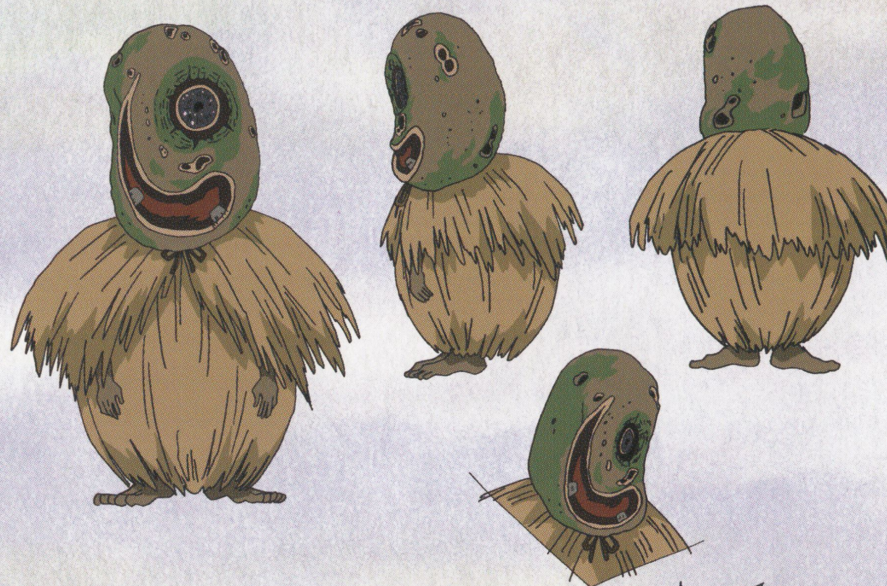
#4 油すまし

ゲゲゲの森に住んでいる、物知りでおとなしい妖怪。鬼太郎と将棋を指すのがすき。



#4 山じじい

ゲゲゲの森に住む妖怪で、大きな一つ目と口が特徴。
普段は穏やかで優しい妖怪だが、森に迷い込んだ裕太が知らずに掟を破って山じじいの木の実をもいでしまうと、怒り狂い、巨大化。「返せ〜」という声とともに、ゲゲゲの森じゅうに長くのびる手を操って誰彼かまわず攻撃をしかけた。裕太が実を返して素直に謝ると、また穏やかな山じじいに戻り、森へ消えていった。





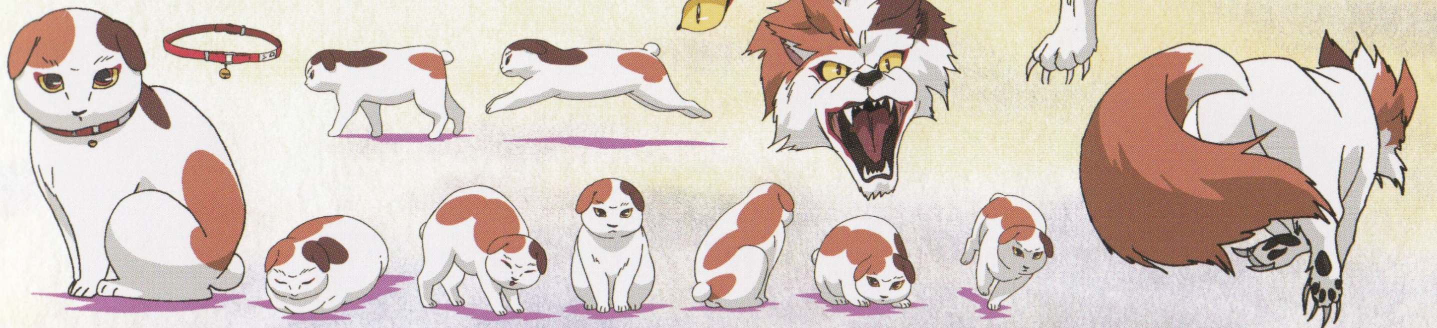
#5 かみなり

両手にバチを持ち、背中にある太鼓を叩くことで電気を発生させ、自在に操ることができる。巨大なかみなり星の上に乗っている。星の引力を自在に操ることができ、電気攻撃と組み合わせて岩の塊を相手に投げつけることも。昔は人間達に恐れられていたが、現代ではその存在を忘れかけられているため、もう一度人間達から関心を持たれたいと思っている。

#6 すねこすり

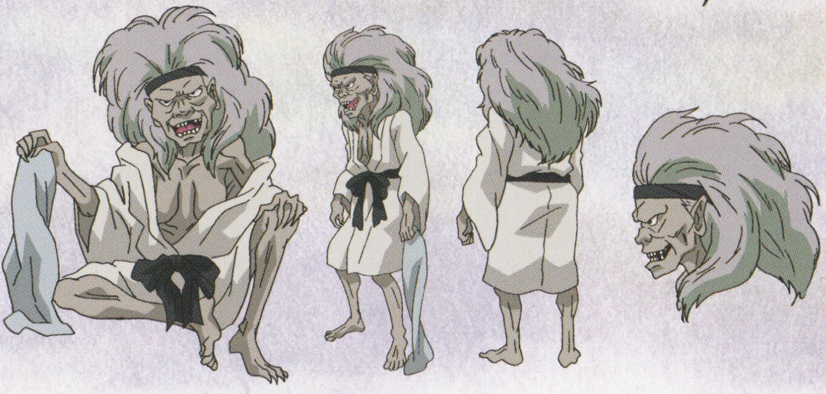
猫に似た外見をもつ妖怪。人間の足の間をすりぬけるときにその人間から気力を奪って生きている。
人なつこく温和な性格をしていて、人が多く行き交う場所では多数の人間から少しずつ気力を奪って生きてきたのだが、人口が少なくなった村では一人の人間にとりついていたため、とりつかれた人間はどんどん弱っていってしまった。





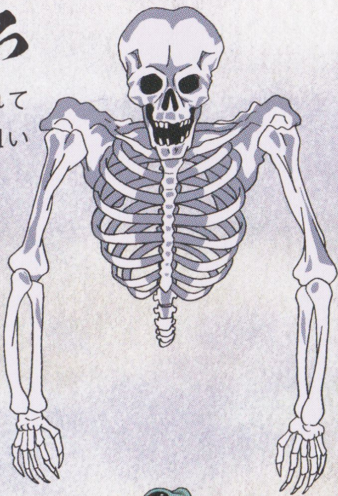
#7 脱衣婆（だつえば）

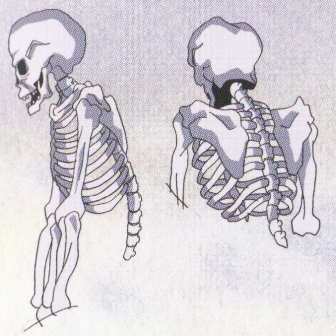
痩せこけた老婆の姿をしている。
三途の川のほとりに立ち、亡くなってあの世にやってきた人間から衣服をはぎとる。はぎとられた衣服は、生前にその人間が犯した罪によってその重さが変わり、持ち主の死後の処遇を決めると言われている。



#8 がしゃどくろ

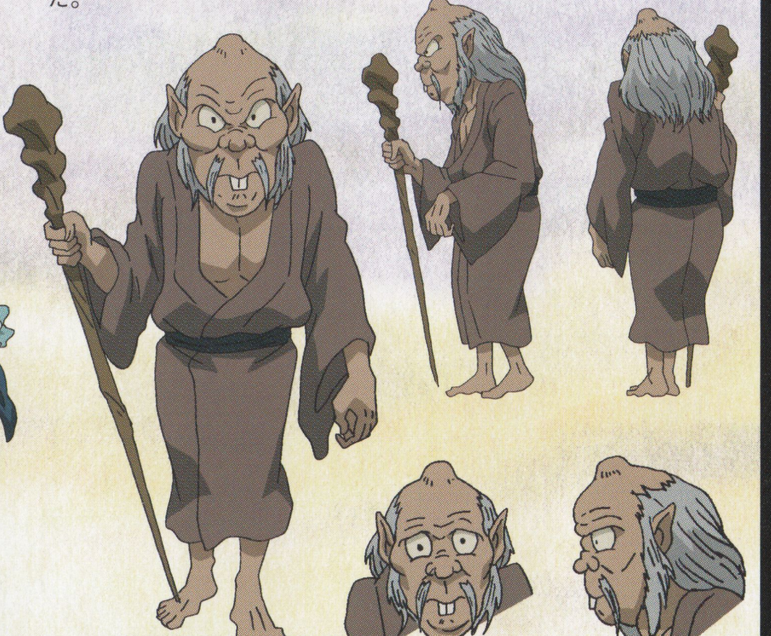
巨大な骸骨の妖怪。石碑を倒されて復活し、石碑を倒した人間を狙い襲った。目から光線を放つ。





#8 鏡じじい

古い鏡に住む、角のようなこぶをもつ老人の妖怪。
鏡の中の世界を自由に歩き回ることができる。ゲゲゲの森の住人である 子泣きじじい と 砂かけばばあ とは、付き合いが長く、飲み友達でもある。内気で口下手だが惚れっぽく、まなに一目惚れし、襲い来る妖怪からまなを守ろうと鏡の世界にかくまった。



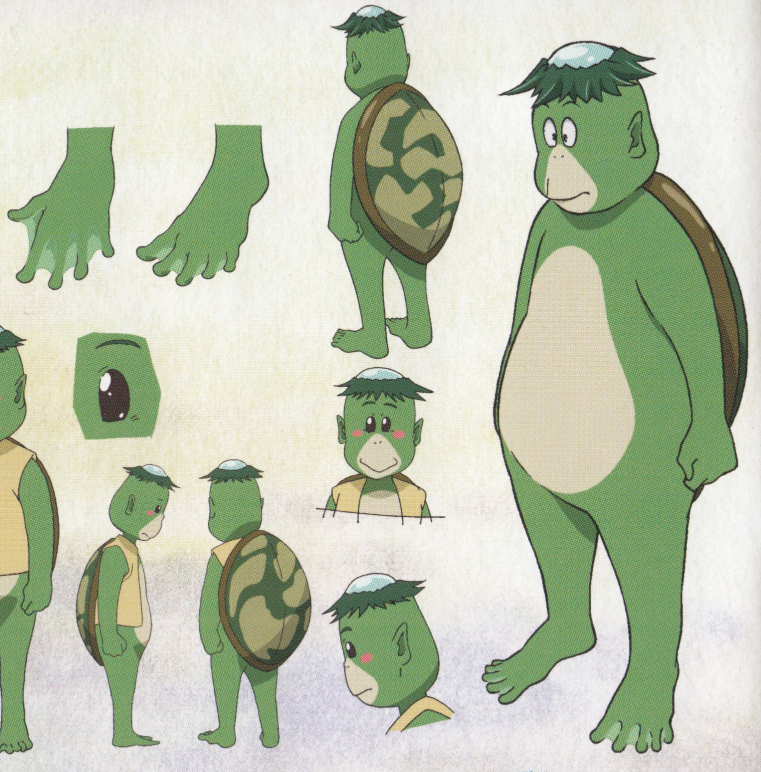
#9 いそがし

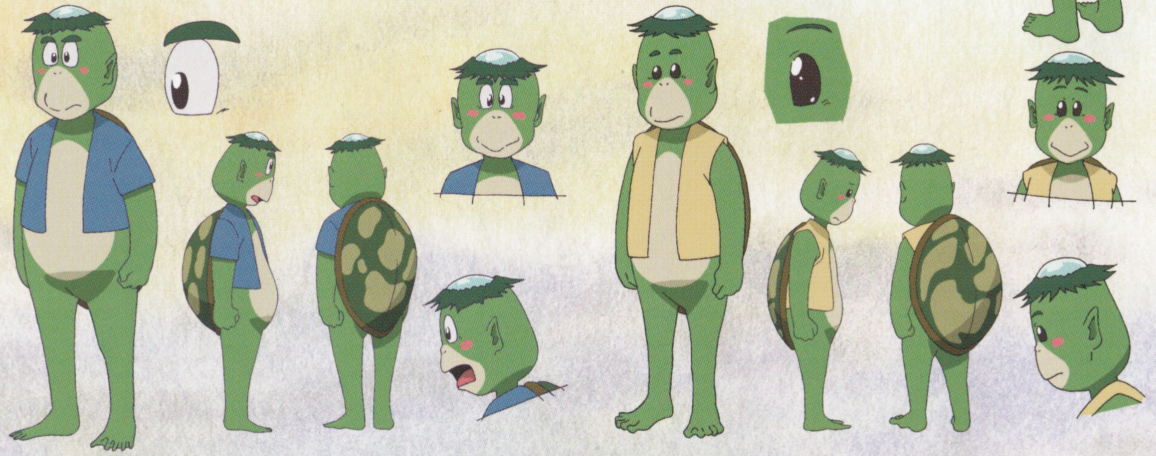
取り付かれた人間は働きたくなってじっとしていられなくなるが、現代の人々は普段から皆いそがしいため、近頃はあまり出番がなく、暇である。



#9 河童

頭にお皿、水かきのついた手、鋭いくちばし、背中には大きな甲羅のある妖怪。きゅうりと相撲が好きで、山奥の川辺に住んでいる。真面目で働き者で、頭も良い。ただし、頭のお皿が渇くと力が出なくなるという弱点がある。尻子玉を抜くことで、相手をふぬけにし、やる気をなくさせることができる。





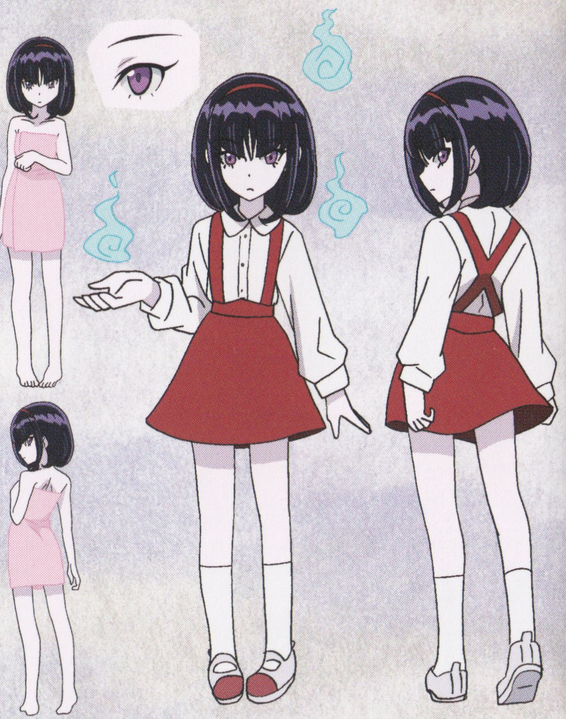
#10 ヨースケくん

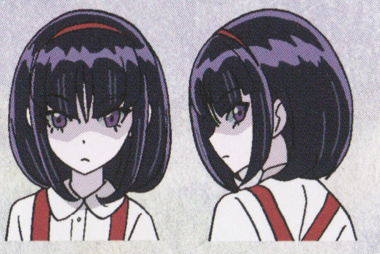
学校の2階の男子トイレにいる妖怪。イケメンだが惚れっぽくてストーカー気質。



#10 花子さん

学校の七不思議として有名な、おかっぱ姿に赤い吊りスカートを着た女の子の妖怪。3階女子トイレの奥から2番目に住み、「花子さんいますか?」という問いかけに対して「はーい」と答えるという。笑う人体模型、走る二宮金次郎、人面犬などの妖怪たちと一緒に、学校の七不思議の一つに数えられる。





#11 #12 妖怪獣

刑部狸たちが崇める巨大な妖怪。妖怪獣と呼ばれているが、その正体は蛟龍。七百年生きた蛇が蜃気楼の中に入って卵を生む妖怪で、その卵が地下に入り、更に数百年が経過すると、再び天に昇り妖怪となると言われている。刑部狸たちと同じく要石がエネルギー源となっている。









#11 #12 刑部狸

四国から八百八狸たちを率いてやってきた、巨大なたぬきの妖怪。最も妖力が強い。





美術ボード







BIXA-9011/BIBA-9021

デザイン：バナナグローブスタジオ